

第 99 回でいただいた主な御意見（概要）

全体について

- 今、いろいろな議論をしていますが、データが明確にない。そのため、体系的にデータを蓄積していくという方向性が打ち出されていることは良い。
- ウィズコロナ、ポストコロナへの対応がそれぞれの項目の中でばらばらに記載されているが、この文書を打ち出すというのであれば、ぜひ、ウィズコロナ、ポストコロナという項目を 1 つの項目として、いわゆるサステナブルな教育の環境の整備という観点で打ち出していくのはどうか。座学等の一般的な一方通行の教育ではなくて、大学院の教育というのは、研究や研究者間のコミュニケーション等のディスカッションも出てくるので、そういう中で既存のシステムが本当に十分事足りているのか。全然足りていないという声も聞くので、大学院の教育という立場、研究という立場から、項目を 1 つ設けてはどうか。

「四つの人材養成機能と三つの方針に基づく大学院教育の推進」について

- 大学院の人材養成機能について、今はどちらかというと社会的な課題を見つけて、社会的な価値を創造する人材が大事。特に、そのような人材の育成は、日本は弱いところもあるため、そこを強化していくことが大事。
- 関係府省との連携については書いてあるが、産学の連携があまり出されていない。需給ギャップの話もあるので、きちんと明確に言葉として書いた方がいいのではないかな。
- 企業との関係もあるが、その先には、地域社会や地方創生というキーワードが必ず出てくる。その中で博士人材が社会イノベーターという格好で、自治体も含めたいろいろな動き方をするという展開になり、人文・社会も活躍する世界が生まれてくるといった流れがもっと表に出るといい。
- 需給ギャップが問題。1 つは分野の問題で、必要な分野の博士が足りていなくて、必ずしも必要としているわけではない領域の博士が大量に出てきているということ。もう一つは方法論で、同じ生物学でも、コンピューテーショナルな方法を使うタイプの人たちは飛ぶように売れる状況にもなっている。分野と方法論の両方について、どうも大学側が世の中の先読みができていない、あるいは対応できていなくて、ダイナミックに切り替えるべきところがうまくできていないというのが非常に大きな問題。
- キャリアパスを見据えて、ニーズのある分野の博士を育成する必要があるものの、博士は 1 年、2 年で育成されるものではない。人材育成は、ある程度、長期スパンも考えて、基盤的な分野をきっちり輩出していくことも重要。社会に出て、学生時代の専門領域をピンポイントでやっている方はむしろ少数派、基盤的な力をつける必要がある。時流によって分野を絞り、5 年後は要らなくなったということにならないように、慎重に議論する必要がある。

- 大学が送り出していく人材と、今、社会が求めている人材がアンマッチになっていることは明らか。マクロの視点で見て、需給というのも少し考えたほうがいいのではないか。個々の学問がそれぞれで大事だということはよく分かるが、過去の大学が考えたものと、全体としてできた絵と比べると、社会とのアンマッチが大きく出ている気がするので、検討いただきたい。

「優秀な人材の進学促進と修了者の進路の確保、キャリアパスの多様化」について

- 大学院の進学者のクオリティーの問題、一旦ここまでブランドイメージが落ちてしまったものを復活させるのは、かなり大胆な手を打たないと、なかなか悪循環を止めることはできない。企業で働く人を増やすためには、好事例をどう広げていくかということがすごく大きな突破口になるだろう。
- 博士課程学生への経済的支援については非常に投資効果の高い重要なことだと思うが、今想定している規模で大丈夫なのか。
- いまだに博士人材が少なくなってきた、国立大学が困っているから博士を増やしましょうという論理が動いている。日本にとって必要だから博士人材を増やさなければならないということを前面に出していくことが重要。

「大学院におけるリカレント教育の充実」について

- 一般に、博士学位等の学歴というのはネットワーク外部性があるので、自分が博士を持っていると、博士を持っている人を評価するという傾向は、出てくると思われる。その意味で、企業でリカレントをもっと促進していくと博士人材の力量というものをもっと評価するようになる。また同時に、リカレントで来た社会人の学生がプログラムオリエンティッドリサーチの問題を持ち込むので、それによって非常にストレートの学生たちとの相互作用から、現実との接合性の高い研究が活性化されるようなところもある。そのため、リカレントは、かなり力を入れて促進する必要があるのではないか。

「人文・社会科学系大学院の在り方」について

- 人文と社会を一緒にしないでほしい。修士課程を出た後の活躍する場が全然違う。人文系は高校の先生や心理学だと臨床心理士等、社会科学系はビジネスの世界か法曹の世界で働くのがほとんど。理系の修士とあまり変わらないのが経済や経営の人たちではないか。その意味では、全く違うタイプのキャリアで、全く違うタイプの要件にさらされているので、人文と社会を同じカテゴリーにするという議論は、大学院教育の政策を考える上で間違える可能性がある。
- 「社会ニーズからの乖離」という言葉について、大学院教育を行っている人が社会を全然見ていないと思われるが、社会があつての研究・社会を対象としたものなので、言い過ぎではないか。出口のところだけを見ているのではなく、もうちょっと遠くを見て

いるあまり、近くが見えにくくなっているというものはあるかもしれないので、「マッチング不足」でいいのではないか。

- 具体的な取組項目案が他と違って再掲ばかり。せめて、「アカデミア以外のキャリアパス確保への働きかけ」を1番に、これまでなかったものとして挙げていただいたらありがたい。
- 具体性に欠けるのではないか。非常に難しいとは思いますが、もうちょっと踏み込んだことを言わないと、結局、何も変わらないのではないか。大学院なので当然専門性が高くなければいけないが、専門性を社会課題と照らして相対化できるような機会を設ける等、卓越大学院プログラム等での経験も踏まえて積極的に推進していかなければならない。
- 博士後期課程の学生に生活費相当額の経済的支援を支給という話は良いと思うが、人文系はむしろ大変なのは大学院が終わってから、結局、収入が非常に不安定であること。それでは、優秀な人は来ない。実際、優秀な人ほど大学の学部で外に出てしまっている。構造的な問題なので、すぐには解決できない問題ではあると思うが、少なくとも優秀な人には早期にきちんとした評価が得られるような取組は必要なのではないか。
- 文系博士課程の学生をアカデミア以外の産業界で活躍させようという理念は、リーディング大学院の目標のひとつであった。文系の大学院博士課程のカリキュラムポリシーとして、産業界で活躍できるような知識やスキルを得るためのカリキュラムに揃えることはかなり無理がある。リーディング大学院では、各専攻の外側にプログラム独自のカリキュラムを作った。リカレント教育同様に、このコロナ禍で蓄積した授業科目のアーカイブを大学がうまくアレンジして、あるいは学生が選択デザインして、「〇〇副専攻修了」のようなコース化することができると思う。必ずしも単位認定を必要としないリカレント教育と異なり、文系博士課程学生は産業界就職のために学歴にこの副専攻修了が明記され単位取得科目が列挙されていることは就職活動の際には必要であるはず。

「大学院教育のグローバル化と魅力ある教育研究環境の整備」について

- コロナ禍ということで、国境を越えた往来が自由にできず苦勞している。文章を見ると、現場の苦勞があまり入っていない。
- 日本は少子化で、大学自体、全体の若年人口が減っている。一方で、大学院では外国人が増えているので、日本人の育成も大事だが、外国人の人材をきちんと育成して、その方が日本で活躍できること、そのような方もグローバルに活躍できるようになることも少し強化していく必要があるのではないか。